

府食第548号
令和4年10月4日

食品安全委員会委員長 山本 茂貴 殿

研究・調査企画会議事前・中間評価部会
座長 脇 昌子

令和4年度食品健康影響評価技術研究の二次公募における採択課題
(案) について

このことについて、令和4年9月16日に開催した令和4年度研究・調査企画会議事前・中間評価部会（第3回）における審議の結果、別添のとおり取りまとめましたので、報告いたします。

(別添)

令和4年度

食品健康影響評価技術研究の
二次公募における採択課題（案）について

令和4年9月
研究・調査企画会議
事前・中間評価部会

令和4年度食品健康影響評価技術研究の二次公募における採択課題

公募課題1：食品分野におけるナノ粒子のリスク評価手法検討に関する研究

受付番号	3	研究期間	令和4～6年度	
主任研究者	広瀬 明彦	所属機関	国立医薬品食品衛生研究所	
課題名	食品中に存在するナノ粒子のリスク評価手法に関する研究			
研究目的概要	<p>食品中のナノ粒子のリスク評価においては、毒性影響を左右すると考えられるばく露直前のナノ粒子の分散状態を定量的に把握することが重要であると考えられているが、食品中のナノ粒子の分散状態も含めてその定量的分析を行うことは困難であるとされている。本研究では、現状ナノ粒子のリスク評価ガイダンスやナノ粒子を分析する手法の情報収集、整理や課題抽出を行うと共に、食品中のナノ粒子の分析を最新の分析手法と既存の分析手法を比較検証するケーススタディの結果を加えて、食品に直接的あるいは間接的に含有するナノ粒子の分析法と食品中のリスク評価に関する留意事項の基本的な考え方（基本原則）の骨子をまとめる。</p>			
評価所見	<p>(総合コメント) 食品中のナノ粒子のリスク評価の課題、EFSAにおける二酸化チタンのリスク評価の課題等々、現在の国際的視点の動向を把握しており、ナノ粒子のリスク評価の考え方をまとめるための論点の整理に資すると期待できる。</p> <p>(その他) ・理化学的分析法のウェット研究をどのように生体影響の予測に結び付けるかの道筋が明確でない。 ・初期2年間は、達成目標とその実施計画が明確だが、3年目の研究計画がやや曖昧である。</p>			
評価点	合計点	研究の妥当性	研究目標の達成度	研究成果の有用性
	15.9/20点	4.5/5点	3.5/5点	7.9/10点

公募課題2：細胞培養技術を用いて製造される食品のリスク評価手法に関する研究

受付番号	7	研究期間	令和4～5年度	
主任研究者	五十君 静信	所属機関	東京農業大学	
課題名	細胞培養技術を用いて製造される食肉のリスク評価手法に関する研究			
研究目的 概要	<p>最新の細胞培養技術を用いて製造される食品（いわゆる培養肉）の研究・開発が進められており、当該技術で製造される食品のリスク評価における基本的考え方を検討することは急務である。諸外国では当該食品の安全性確保のルール作りが検討され始めている状況である。</p> <p>本研究では、当該食品の安全性評価に関しこれまでの調査結果や諸外国で検討されているリスク評価項目に関するガイダンス等の情報を活用し、当該食品の特性を踏まえた危害要因（ハザード）を特定し、さらに実際に当該技術によりモデル培養肉を作成し、従来肉との比較による検査手法を検討・提供することにより、リスク評価の「基本的考え方」の作成に資することを目的とする。</p>			
評価所見	<p>(総合コメント)</p> <p>計画通りの研究が実施され、従来肉との安全性における比較ができれば、培養肉の食品健康影響評価の考え方をまとめるにあたっての貢献が期待できる。</p> <p>(その他)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リスク評価の基本的考え方の作成を目的としており、構成メンバーも適切である。 ・2年計画で「基本的考え方」を作成していただくようなスピード感が欲しい。 ・モデル培養肉作成の現実性について、最新培養技術の特定を慎重に行った上で、実用化研究を進めているグループとの連携が期待される。 			
評価点	合計点	研究の妥当性	研究目標の達成度	研究成果の有用性
	15.5/20点	4.6/5点	3.6/5点	7.3/10点

※令和4～6年度の3か年計画での応募であったが、評価所見を踏まえて、令和4～5年度の2か年計画として採択することとする。